

Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

「働きやすい環境づくり」で病院再生

④6 聖隷横浜病院 (神奈川県横浜市)



病院外観

聖 隷福祉事業団が旧国立横浜東病院から経営移譲を受け、2003年に開院した聖隷横浜病院。国立病院時代は単年度約8億円の赤字を出し、末期には17人の常勤医しかいなかった。しかし、10年度から黒字化し、常勤医は現在78人に増加、経営不振から抜け出した。病院再生のカギは何か。

岩崎滋樹院長は「職員が働きやすい環境づくりに取り組んできました。職員が定着し、増えることで、医療の質を上げることができ、口コミで患者さんも集まるようになりました」と話す。「職員が働きやす

い環境づくり」は病院の基本方針。岩崎氏は07年に院長に就任すると、出産や育児で離職しがちな女性医師・職員の確保に注力してきた。

まず同年、1人分の仕事を2人で分ける「医師ジョブシェアリング(JS)制度」を導入した。週30時間勤務で年収や有給休暇は常勤医の6割を保障し、常勤医と同じ福利厚生が受けられたり、専門医や認定医の資格を取得・維持できたりと、非常勤医にはないメリットを提供。これまで12人の女性医師が活用している。

また、利用者の便宜を図るため、通常の院内



さまざまな問い合わせに対応するため看護師や事務職員らが立つ総合案内(右端)

利用者の要望や意見を拾い上げる投書箱



診療科と職員を紹介する広報誌「聖隷よこほま」

女性医師が働きやすい環境がつけられている



24時間保育にも対応している「ひだまり保育園」

最新医療機器もいち早く導入。写真は256列CT

保育のみならず、08年には週2日24時間対応の院内保育園を開園した。09年は「看護師ワークシェアリング制度」を導入。遅出・早帰り、夜勤のみ、週3～4日勤務など、看護師の実情に合わせて、さまざまな勤務形態に対応している。

このほか、子育て中の医師・看護師の駐車場の優先使用許可、妊娠中の当直免除、育児休職期間の最長3歳まで延長など、細やかな制度をいくつも設けている。基本理念に掲げる「隣人愛」は、職員にも及んでいるのだ。

このような取り組みによって、医師数や看護師数

が飛躍的に伸びただけでなく、初期研修医数の増加や患者満足度の向上にもつながっている。横浜市の救急拠点病院として、救急車受け入れ件数も増えている。

診療面では、内科系が充実。また、耳鼻咽喉科の鼓室形成術では神奈川県内1位、全国6位の症例数を誇る。栄養サポート、緩和ケア、褥瘡対策の各チームを設け、連携も推進。最先端の医療機器も導入し、医療の安全と質を高めている。安定した経営と地域中核病院としての基盤を築いた今、老朽化した病院の建て替えを目指している。

「よりよい自分」に出会える「共同体」

④7 スーパースマイル国際矯正歯科 (東京都渋谷区)



代々木上原オフィス。内装はややシック。
デザインは広尾も手掛けた中西良雄氏が担当

波瀾万丈、紆余曲折の末にたどり着いた形がある。賀久浩生院長が広尾に20坪のオフィスを開いたのは1996年。父の後を継ぎ、新宿・歌舞伎町で開業してから2年後のことだった。そこに至るまでの物語の数々は冒頭の形容にも余るほど。いずれ稿を改めてお伝えすることにしよう。

その後、99年に100坪のスペースに移転。2003年12月には自宅を兼ねた代々木上原オフィスを開業し、現在のスタイルに落ち着いた。

「患者さんは日本人と外国人が半々。小児歯科と矯正歯科を標榜しています。小児といっても、泣

いて騒ぐ患者は半分にも満たない。矯正の患者は生死にかかわる状況にはいません。皆さん、よりよい自分になるため、QOLを上げるためにここに来られる。ならば、来ること自体を楽しめるようにと考えています」(賀久氏)

通常の医療機関では問診票で罹患や発症といった負の要素を問う。だが、賀久氏は「約束を守った」「口の中がきれい」など、「良かったこと」を評価している。全患者が通信簿のようなシートで回答。フルマークなら、コインがもらえる。コインを集めると、ルーレットに挑戦。「当たり」が出ると、特



ロビー。右手にルーレットと賞品が見える



患者が座るいすの上にはモニター。仰向けになったままDVDで映画を観賞しながら受診できる



ゲーム。同じフロアにはスノーボード型のものもある。両方ともカナダ製



クリニカルエリア。いすが7台並ぶ広さは広尾も同様



「ユニホームは16種類。季節ごと、オフィスごとに変えています」(中里由美・トリートメントコーディネーター、中央)



広尾オフィスの内部。吹き抜けを生かし、子供にも親しみやすい作り

典が手に入る。

「受診は自分が良くなる過程にある。子供たちは隣にいる同世代の友達と知り合える。休みの日に付き添ってくれたお父さんと一緒にゲームに興じたり、本を読んだりして帰ってもらう。そういう空間でありたいんです」(同前)

通常なら、患者はプライバシーを優先し、個室を求める。だが、賀久氏は「出会いの場」を重視。ワンフロアに7席の診療室ではほかの患者の様子も目にするので、「自分だけが特別なわけではない。同じ境遇の人はほかにもいる」と立ち向かい、助

け合う姿勢に期待する。

「医療機関には違いありませんが、同時に一つのコミュニティでありたい」(同前)

プライベートも含めた相談事を持ち掛けられることもしばしば。「普通の病院よりも濃い医師—患者関係」が当たり前になる。賀久氏の立ち位置は「遠い親戚のおじさん」に近い。

原点はかつて学んだ米国の歯科医療。特に小児や矯正の分野では患者が医師を「マイドクター」と呼ぶ風土があった。日本にもそんな文化を根付かせるべく、共同体は開かれている。